ときめく心から声があがると、まわりの人の耳に届く。なかのどれかがその場の人びとの声になり、いくつかがその場にいなかった人の心にも届く

―文学形成とその記録過程を中世北インドの帰依信仰文学の文字化（筆写・石版刷り・

活字印刷・電子媒体）の事例で考察する　　2010.07.02/ 2011.04.23　　坂田　貞二

注：①　ローマ字転写は、Kyoto-Harvard 方式による。

②　レジュメは、本論３ページおよび[III]の(1)(2)(3)の PDF ３ページ＝合計６ページ。

[I]　このテーマに関心をもったいきさつ

５年ほどまえにわたしは、短い文章を書いた。拓殖大学 人文科学研究所・文京アカデミー共催　オープンカレッジ　2006.6.17　＜絵画・図像が伝えるイメージとメッセージ＞への参考資料として、そのとき参加くださった方々にＡ４判の紙１枚にプリントしてお配りしたものである。

その題は、「心になにかが生じる（帰依信仰）→それをことばで表出して詩に→からだで表現して劇に→そして劇を文字と絵で記録する（挿絵入りの台本や原文）：中世以降の北インドの文芸を事例に考える」となっている。

さて、わたしの小文はこうはじまっている。

天界から降臨して牛飼の長の家に生まれたクリシュナ、同じく天界から降臨して王家に生まれたラーマは、中世以降北インドの人々の信仰を集めてきている。

その信仰は文芸の諸相で表現されている。時代を追いながらそのさまを見よう。15 世紀から 16 世紀にかけて北インドでは、人が己れを空しゅうして神に包摂されることを願う帰依信仰がさかんになり（A）、その信仰が当時の言語で唱されて定型の歌（詩）となる（B）。時代が下って 18 世紀ころになると詩の趣旨が当時の話し言葉をも取りこんだ劇で演じられ（C）、その演技のさまがいつのころからか絵に描かれるようになった（D）。

この過程は、クリシュナ信仰にあっては、クリシュナ信仰の盛行→16 世紀に活躍した詩人スールダースほかによる抒情的な詩の詠唱→クリシュナの生涯の主要な場面のオペラ（ラース・リーラー）化→19 世紀末に出版されたラース・リーラー台本に挿絵を入れる、となっている。

ラーマ信仰の場合は、ラーマ信仰の盛行→トゥルスィーダースによる叙事詩『ラーム・チャリト・マーナス（ラーマの行いの湖）』唱読→ラーマの生涯の主要場面を演じる野外劇ラーム・リーラー定着→19 世紀中葉に出版された叙事詩原文に挿絵が入る、とほぼ同じ過程を辿っている。

そしてメディア時代の今日、クリシュナ信仰とラーマ信仰の物語が劇画、カセット・テープ、TV（ヴィデオ・CD）、映画などによって音声と映像が盛んに電子化されている。

[II] いわゆる「聖典」の石版印刷本とその歴史的位置づけ

2006 年にわたしが主に参照したのは、つぎの 2 書であった。

(1) raghunAthdAs. *zrIrAm carit mAnas*, kAzI, 1869.

＝トゥルスィーダースによる叙事詩『ラーム・チャリト・マーナス（ラーマの行いの湖）』

石版印刷本。縦 29 センチ×横 23 センチ、pp.468。

この書からの挿絵は、坂田「インドのラーマーヤナー16 世紀北インドのトゥルスィーダースによる翻案を中心に」（金子量重、坂田貞二、鈴木正崇編著『ラーマーヤナの宇宙―伝承と民族造形』、春秋社、1998 年刊の pp.4-48）に掲載。

(2) raGgIlAl. *zrI vraj vihAr*（ランギーラール『聖ブラジュ地方を逍遥』）, mathurA: lAlA zyAmlAl buk selar,1893.

＝クリシュナの生涯劇ラース・リーラー台本の石版印刷本。縦 25 センチ×横 18 センチ、pp.300(手許の本ははじめの 2 ページを欠く)。

この書からの挿絵は、坂田「北インドの神話・伝説と宗教芸能　クリシュナ神の生涯を再現するラース・リーラー」(鈴木正崇 編著『神話と芸能のインド　神々を演じる人々』山川出版社、2008 年 8 月、pp.91-110）に掲載。

石版印刷がどういうものか。それは『広辞苑』第 6 版でこう説明されている。

「石版」: 石版石を磨いて、その面に油脂性のインクなどで文字・図形を描いたもの。

「石版印刷」: 水で湿した版面に印刷インクを与えると、文字・図形部分にだけ付着するので、これを紙に転写する。

「石版画」: 石版印刷による版画。リトグラフ。

その小文を書くときにわたしがこの二つの刊行物に注目したのは、**これらの石版印刷本がラーマやクリシュナの姿を多数の絵で描いている**こと、これらの本が**出版されたのが 1860 年代から 1900 年くらいであり、活字印刷が北インドで盛んになる直前**であることからである。つまりわたしは、「文字・図形を」描くという技法と活字印刷まえの印刷過渡期という観点からこれらに注目したのである。

[III] 先行研究

参照すると学ぶことがあろうと期待できる書として、つぎの 2 種類が考えられる。

A. ヒンディー文学史の 19 世紀後半を扱ったもの。

1. vArSNey, laksmIsAgar. *Adhunik hindI sAhitya(san 1850-1900)*, prayAg, 1941.
   (現代ヒンディー文学史　西暦 1850-1900)
2. Trivedi, Harish. "The Progress of Hindi, Part 2: Hindi and the Nation", pp.958-1022 of Sheldon Pollick (ed.), *Literary Cultures in History: Reconstructions from South Asia*, Barkeley: University of California Press, 2003

B. 19 世紀のヒンディー語ジャーナリズムを扱ったもの。

1. vAjpeyI, ambikAprasAd. *samAcarpatron kA itihAs*, banAras, 1953.
   (ヒンディー語新聞の歴史)

期待しながらこれらの文献のページを繰ったが、それらでは作家・作品、新聞社・新聞記事に関心が集中していて、19 世紀後半の文学やジャーナリズムを媒介する手段・手法（印刷）には言及がない。注目し関心がある事項が異なるのだろう。

C. そういうなかで、つぎの 2 点はこの問題を考えるうえで有力な糸口を与えてくれる。

1. Stark, Ulrike. "Hindi Publishing in the Heart of an Indo-Persian Metroplolis : Lucknow's Newal　Kishore　Press(1858-1895)", pp.251-279 of Stuart Blackburn and Vasudha Dalmia (eds). *India's Literary History: Essays on the Nineteenth*

Century, Delhi: Permanent Black, 2004.

2. Orsini, Francesca. *The Hindi Publick Sphere 1920-1940: Language and Literature in the Age of Nationalism*, New Delhi: Oxford University Press, 2002.

1. の Stark 論文は、この報告と重なる時期の出版社の活動をとりあげている：
   ① 1830 年にラクナウーに石版技術が伝えられた。② Newal Kishore Press（NKP）は、政府から法令や教科書の印刷・出版で信頼を得た。③NKP 独自の活動では、ヒンディーの古典的な作品やウルドゥー語の読み物のヒンディー語翻案、サンスクリット語の聖典や説話集のヒンディー語翻案、それに「家庭の医学」のようなものを手ごろな価格で出版。④初版の多くは 550 部から 1,250 部が印刷された。再版には一度に 10,000 部がつくられたものがある。
2. の Orsini 著作は、この報告のあとの時期を主題とするが、1.3.に“Arenas of Literature: Journals,the Publishing Induatry, and Poetry Meetings”(pp.51-89)という節を設けている点で、示唆に富む。

このような先行研究を念頭に置き、手持ちの石版印刷本で一つの事例を確認したい。

[IV] 『ラーマの行いの湖』の例で辿る写本、石版印刷本、活字本の流れ

この過程をトゥルスィーダース(1532-1623)による叙事詩『ラーム・チャリト・マーナス（ラーマの行いの湖)』の例で辿ってみよう。1869 年に書かれた写本（手書き本）(1)、1869.年刊の石版印刷本(2)、1888 年刊の活字印刷本(3) が手許にある。これら三点の冒頭ページを PDF で示す。

(1) *rAm carit mAnas*, 1869 ＝『ラーマの行いの湖』の**原文の写本**。縦 27 センチ×横 20 センチ、両面書き 447 葉を本の形に綴じたもの。⇒*レジュメの p.4.*

(2) *zrIrAm carit mAnas*, kAzI, 1869.

＝『ラーマの行いの湖』原文の石版印刷本。縦 29 センチ×横 23 センチ、pp.468。

裁可 raghunAthdAs 、元版製作 devIprasAd tevarI & sItAram mizra,
印刷 gopAl 、頒布 durgAprasAd kaTAre. ⇒*レジュメの p.5.*

(3) *rAmAyaNa tulsIdAskrt saTIk*, lakhnaU: naval kizor, 1888.

＝『ラーマの行いの湖』の**原文と**ラームチャラン師による**現代語訳**の**活字版**。

縦 18 センチ×横 37 センチの貝葉型（写本の基本的な形式）で、両面印刷。
1,438 ページで綴じてない（写本の体裁を保つため)。⇒*レジュメの p.6.*

この例でわかるように、写本、石版印刷本、活字印刷本が 19 世紀後半で重なりながら次第に活字本に移行してゆく。

[V] ほかの石版印刷本：古典的な詩書から大衆的な詩物語まで

(1) *rAmcandrikA* , 刊行地の記載なし、1865
＝オールチャーの宮廷詩人ケーシャヴダース（1555-1617）による詩の技法を駆使したラーマ物語り。異本の読みを脚注につけている。縦 27 センチ×横 18 センチ、全 240 ページだが、手許の本ははじめの 8 ページを欠く。

(2) *pUrA mAs ko khyAl*, mumbaI, 1897. ＝商人が長旅で不在のあいだの月日の移り変わを詠ったキャール（詩物語)。縦 15 センチ×横 12 センチ、32 ページ。裏表紙の広告は活字印刷。

(3) *seTh seTAnI ko kyAl* , mumbaI, 1900. ＝商人とそのおかみさんを取りあげたキャー

ル。 縦 15 センチ×横 12 センチ、64 ページ。

一方で 1889 年に mumbaI のヴェンカテーシュワル印刷所からチャンドカバル王のキャールが活字で出されている。

19 世紀後半は、写本・石版印刷本・活字本が並存しながら、活字本へと移行していった時期である。

[VI] 石版印刷本の意義：写本より容易に複数の人に（信仰）、語り・伝承を文字で定着（娯楽）

信仰の導きとなる大部な書の文字化、民間の語りや伝承の文字記録――これらが、19 世紀後半の石版印刷本の盛行をもたらしたのであろう。

[VII] 結び：わたしたちの文学史叙述には、個人の心のときめきとそれを受けとめた人の感性、それに「ときめき」を「受けとめる」場や手段・手法も含めたい

ここでわたしは改めて考えることになる。

A. なにが文学か（人を感動させるなにか、宗教信仰の吐露、大衆娯楽）
B. 文学創造の場と媒体(口承とその文字記録、ラーム・リーラーやラース・リーラーなどの芸能、家庭・寺院などでの讃歌詠唱、詩会、近現代における筆での表現・創造)

[付記]

① 手許の写本・石版印刷本・活字本は、1963 年からバナーラスとヴリンダーバンの古書店で目についたものをその都度買い求めたものにすぎない。組織的に探して購入したものでないことをお断りしておきたい。

② [IV]の(3)の版元たるラクナウーのナワル・キショール社と[V]で言及したムンバイーのヴェンカテーシュワル印刷・出版社の活動が、この問題を考えるうえで参考になろうか。

なお、ラクナウーのナワル・キショール社の刊行物の収集と研究報告は、鈴木 斌・田中敏雄を中心とする活動が、東京外国語大学を拠点として行われた。

③ 宗教書と家庭医学書は、バナーラスではタークルプラサード社から小冊子が出版ざれている。